

小正月行事としての裸回り

Circumambulation by a Naked Couple Around the Fire Held on the Minor New Year's Day

安田 尚道

Naomichi YASUDA

1 「裸回り」とは

「裸回り」とは、小正月の一月十五日（あるいは元日、節分）の夜、夫婦が裸になって、「粟穂も稗穂もこのとおり」「割れた、割れた、実入って割れた」といった、男女の性器の様を象徴的に表わす唱え言を唱えながら、四つん這いで囲炉裏を三度回る、という行事である。唱え言から、粟・稗の農耕儀礼であったと考えられる。

この行事の分布は、東北地方から中国地方に及ぶ。すなわち、青森県・秋田県・宮城県・山形県・群馬県・埼玉県・茨城県・千葉県・神奈川県・新潟県・富山県・岐阜県・京都府・兵庫県・和歌山県・岡山県・鳥取県に具体的事例がある⁽¹⁾。

2 これまでの研究

この裸回りについて私はこれまでに三回、活字で述べる機会を得た⁽²⁾（①～③）。

①安田尚道（1971）「イザナキ・イザナミの神話とアワの農耕儀礼」〔日本民族学会《民族学研究》第36巻3号〕☆事例15例をあげる。

②安田尚道（1977）「イザナキ・イザナミの神話とアワの農耕儀礼」〔伊藤清司・大林太良（編）『日本神話研究 2 国生み神話・高天原神話』、学生社〕☆安田（1971）の再録だが、安田（1971）刊行後に見つかった事例12例を追加。

③安田尚道（1981）「東北地方の裸回り」〔東北民俗の会《東北民俗》第15輯、東北民俗の会（仙台市）〕☆事例6例を追加。

安田（1971）以後の、裸回りについてのまとまったものとして、以下の④～⑩がある。

④飯島吉晴(1975)「釜神その他(上)」〔東京教育大学物質文化研究会《我楽苦多》第3号〔他に折込みの表3枚〕☆事例の追加はなし。

⑤大島建彦(1977)「日本神話研究と民俗学」〔『講座日本の神話1(日本神話研究の方法)』、有精堂出版〕☆事例13例を追加。

⑥飯島吉晴(1978)「炬をめぐる習俗」〔農村文化研究所《農村文化論集》第1集、農村文化研究所(米沢市)〕。☆安田(1971)(1977)・大島(1977)の他に事例1例を追加。

⑦大島建彦(1982)「日本の民俗における性」〔『人間の性 行動・文化・社会』(《ジュリスト増刊総合特集》No.25)、有斐閣〕。☆事例2例を追加。

⑧飯島吉晴(1986)『^{かまど}竈神と^{かわや}廁神——異界と此の世の境』、人文書院(京都市)。☆飯島(1978)を再録。のちに「講談社学術文庫」に収録。

⑨飯島吉晴(1991)「裸回りの民俗」〔天理大学宗教学科研究室《天理教学研究》第30号〕☆事例4例を追加。

⑩飯島吉晴(2001)『一つ目小僧と瓢箪——性と犠牲のフォークロア——』、新曜社☆飯島(1991)を再録。これには飯島自身が採録した事例のほか、安田(1971)(1977)(1981)や大島(1977)(1982)が報告した諸事例がほぼすべて取り込まれている。

3 『古事記』『日本書紀』の神話との類似

この裸回りの行事は、『古事記』『日本書紀』のイザナキ・イザナミの神話(身体問答、相手を賛美する唱え言、^{あめのみはしら}天御柱回り)との類似が問題となる。

『古事記』には以下のようにある(『日本書紀』では島の生まれる順などが異なる)。

(1) イザナキ(男神)・イザナミ(女神)の二神は、^{あまつかみ}天神から「この漂っている国をつくりかためな^{つくろいかためな}修理固成せ」と命ぜられる。

(2) 二神が^{あめのうきはし}天浮橋の上から矛で海水をコロロコロと掻き回し矛を上げたと、滴り落ちた海水が積もってオノゴロ島ができたので、二神はこの島に降り立ち、^{あめのみはしら}天御柱を建て、^{やひろどの}八尋殿を建てた。

(3) イザナキはイザナミに、「汝の身体はどんな具合にできているか?」と問い、イザナミが「我が身体は成り足りない所が一つある。」と答えると、イザナキは「我が身体には成り余った所が一つある。我が成り余った所で汝の成り足りない所をさし塞いで国生みをしよう。」と言う。

(4) 天御柱を女神は右から、男神は左から回りながら、まず女神が、相手を賛美する唱え言「アナニヤシエヲトコヲ」を唱え、ついで男神が、相手を賛美する唱え言「アナニヤシエヲメヲ」を唱えて、そのあと二神は交わる。

(5) 生まれたのは水蛭^{ひるこ}子等であったので、これは良くない、として天御柱回りからやり直すことになり、賛美の唱え言を唱える順を逆にして唱えたあとと交わる。数々の島が生まれたが、最初が淡路島、次に四国、次に隠岐、次に九州、次に壱岐、次に対馬、次に佐渡、次に本州、次に……。

『古事記』『日本書紀』の神話の知識があれば、裸回りと上記の(3)(4)との類似は容易に気づく。この類似を最初に活字で指摘したのは高崎正秀のようである。高崎は座談会で、関東地方の裸回りについて以下のように言う(石田英一郎ほか 1956, p.11)。

夫婦が裸になつてイロリの周囲を廻るんですが、天の御柱めぐりの「そのなりなりてなりあはざるところ云々」と同じものですね。それを現代語に訳しただけの形です。だから民間においてやつていることは、国においても天子様が代表してやつておられるんじゃないか。

稲田浩二(1970, p.86)も、兵庫県美方郡美方町【現、香美町^{かみちやう}】の昔話化した裸回りの事例(活字化されたものは、本稿の兵庫県の事例①)について言う。

この話はまるで古事記の国生みの神話そのものである。イザナギ、イザナミの唱和を目の前に見るような昔話である。

さらに、岡山県勝田郡勝田町【現、美作市^{みまさか}】の昔話化した裸回りの事例について、土井卓治・佐藤米司・鶴藤鹿忠(1981, p.199~200)も言う。

この話はイザナギ、イザナミの命の、天の御柱めぐりと似た話である。〈略〉天の御柱めぐりの神話はこの話によって裏付けられるのである。

これに対し、飯島吉晴(1978, p.38)は以下のように言う。

唱え言や所作に類似点の多いことから、イザナキイザナミの国生み神話との同一性を主張することは、ある程度納得できることではあるが、ハダカマワリの場合は男女の方向が同一であるのに対して国生み神話では方向が相異なっており〈略〉

そして、その後も同じ趣旨を飯島(1986, p.113)(2001, p.135)で繰り返し述べている。しかし、飯島には事実誤認がある。諸事例を見てみると、茨城県那珂郡東海村押延の事例

(安田 1971, p.99) では、「男は右から女は左から廻」るのであり(飯島 2001 もこれを引く)、飯島自身が探し出した茨城県勝田市【現、ひたちなか市】の事例(飯島 2001, p.104)でも男女反対方向に回るのである。要するに、反対方向の事例、同一方向の事例、そして方向不明の事例がそれぞれ複数あるのである。

裸回りと『古事記』『日本書紀』の神話とが関連を持つことは確かであろう。しかしそれは、『古事記』や『日本書紀』といった書物の記述が元になって裸回りができた、ということではなく、『古事記』『日本書紀』成立以前にあった、「この世の始まりに、夫婦が男女の性器の様を確かめたあと、物の周囲を回り、交わる」という神話的伝承を元に、一方では『古事記』『日本書紀』に記されたような神話もでき、また一方では小正月の行事としての裸回りもできた、ということだろうと思う。

4 新出の事例

飯島(2001)には、安田や大島が収集・報告した諸事例がほぼすべて取り込まれているので、以下には、私がその後知り得た事例を東から府県順に示すことにする。ただし飯島の引用は、原文を忠実に引く場合と、要約して記す場合(その旨の注記はない)とがあり、後者の場合はあらためて原文を引くこともある。引用文中における【 】は安田が補った部分、〈略〉は安田が省略した部分であり、複数文字の反復を表わす「くの字点」は、「ゝゝ」とする。なお、以下の事例の中には、昔話化したもの、一部の要素の欠けたもの、唱え言のみが歌謡化して伝えられたもの、他の行事と混交したもの、などもあるが、それらも裸回りの行事に由来することは確かだと思われるのでここに載せた。☆以下は安田のコメント。

青森県の事例① 青森県三戸郡三戸町豊川——小井田幸哉(1965)「くふるさとの祝祭②」田植え」〔《デーリー東北》昭和40年3月5日、デーリー東北新聞社(八戸市)、p.6〕

【正月15日の】夜、家族の者が寝静まったところ「実入り」の所作をする家もあった。三戸町豊川の旧家である某家で行なわれていたのは、主人は褌をあてずに起きいで、主婦も腰巻をはずしてこれにつづき台所の爐のまわりを三度めぐって、妻から

「実がいりて候」

と報ずれば、夫は

「穂が出て候」

と受け答え、それに後つぎの子があれば、これも裸体のまま飛び出してきて

「わき穂も出て候」

と声をかけてこれに加わったという。南部町などでも、その他のところでも行なっていたと伝えている。

青森県の事例② 青森県上北郡東北町添の沢——青森県民俗研究会（1972）《青森民俗会報 年中行事特集号》

大みそか 男、女、子供が裸になって家の中を歩く

┌
└

おやじ おくさん

女（おくさん）「きわれだ、きわれだ」

男（おやじ）「穂並いい、～」

子供 「わきぼもそろた～」

※ 〴〵きわれ、というのはモミが熟れすぎて割れること

※ 〴〵わきぼ、というのは分株のこと。

宮城県の事例① 宮城県（地名の詳細は不明）——佐々木喜一郎（1956）「農業民俗」〔宮城県史編纂委員会『宮城縣史 19 民俗 I』、宮城県史刊行会、p.97; p.135〕

農事一般については主として私の住む岩沼町を中心に採集した。〈略〉

粟は稗よりは作付が多い。水利関係で水の不便な山村に作られる。粟の豊作を祝祷するために、大晦日の晩に、主人が囲炉裏の周囲を半裸体で這いまわると、其の後から妻君が覗き乍ら、「粟穂が垂れた、ゝ」と囁す家例のところもあるという。

宮城県の事例② 宮城県宮城郡宮城町【現、仙台市青葉区】——夏堀（謹二郎）・田村（昭）・三崎（一夫）（1967）「愛子の正月行事—赤生木の石垣彦左衛門氏宅の場合—」〔《東北民俗》第2輯、東北民俗の会、p.26〕

チャセゴ 十四日の夜、厄年の者が「明きの方からチャセゴに^{〔ママ〕}来した」と唱えながら家々を廻って、演技などをし餅を貰って厄払いをして歩く。近くの大原部落では蒲団を背負った夫婦一組が、この夜家々を訪ねて外から「何処さ宿を取るべな」と問いかけ、中から宿を貸す旨を答えると、入ってすっ裸になり、男が「粟穂が下がった」と唱え、女が「実^{はえ}入って割れた」と続けながら炉を三度廻る。

☆「夫婦一組が、この夜家々を訪ねて」とあるから、他人の家でこの行事をする、ということであろう。宮城県以外にはこのような事例はない。

宮城県の事例③ 宮城県古川市【現、大崎市】宮沢・加美郡中新田町【現、加美郡加美町】上田多川——万城目喜一調査、安田に教示。

年取りの晩、夫婦が炉を三周する。唱え言は、（男）「粟穂が成った」、（女）「実^い入って割れた」。

秋田県の事例① 秋田県仙北郡西仙北町【現、大仙市】——西仙北町郷土史編纂委員会（1976）『西仙北町郷土誌 近代篇』、西仙北町役場、p.47。

【1月15日】ある家では夫婦が真裸になり、囲炉裏を三回まわる。そのとき男が「粟穂がぶっさがった」と唱えると女は「実^いがえって割れた」と答える。

秋田県の事例② 秋田県北秋田郡合川町【現、北秋田市】東根田——柴田信勝（1980）
「小正月の豊作祈願」〔西郊民俗の会《西郊民俗》第93号、西郊民俗の会（東京都）、p.18〕

秋田県北秋田郡合川町東根田では、明治の初めごろまで、次のような年中行事があったという。小正月の十六日の早朝に、家々のもっとも若い夫婦が、ともに全裸になって、それぞれ（夫）「粟穂さがった（粟穂がたれたの意）」、（妻）「実^みいって割れた（実が熟してはじけたの意）」と唱えながら、囲炉裏^{いろり}のまわりを三度、四つんばいになってまわったという。それより細かなことはわかっていない。

秋田県の事例③ 秋田県仙北郡千畑村^{せんはた}【現、千畑町】——千畑村郷土誌編集委員会（1986）『千畑村郷土誌』、千畑村、p.232。

【正月1日】深夜、主人夫婦がすっ裸になり「アイゴージョキヤタ」と唱えながら、いろいろの周りを回る風習もあった。

秋田県の事例④ 秋田県仙北郡太田町【現、大仙市】——太田町文化財保護協会（1987序）『太田の年中行事』、太田町公民館、p.93; p.96。

（東 今 泉）正月のいつだったか不明だが、一族の者がヨロイ、カブトに身を包み、なにか願いごとを唱え、分家をねり歩いたという。〈略〉最後に本家に行く。その晩、本家では、一番新しい妻（若い）がいろいろのまわりを裸で何回か回ったという（次の跡取りに嫁をもらうまで）〈略〉

（横 沢）小正月 十五日〈略〉長信田地区の某家

家例と思うが、素裸（ヌード）で刀を振りかざし、いろいろの周囲を三回まわった。唱えごととは惜しいかな聞かれなかった。

秋田県の事例⑤ 秋田県由利郡鳥海村【現、由利本荘市】——太田又司（1987）「鳥海の正月行事」〔秋田県民俗学会《秋田民俗》第13号、p.71〕

上笹子のある旧家では、小生月^{こせいづき}の十六日の早朝夫婦が素っ裸で起き、四つん這いになって囲炉裏の周りを廻りながら、前の妻を見て夫が「実^みいってコラ割れた」と言えば、妻は「アワボア下^{した}がった」と言い、これを三回くり返す行事をやったものという。「コラ」とは甲羅のことで、稲などの実の殻が張り裂けるほどの上作になるように、また、「アワボ」とは粟の穂^ほのことで、これまた動物の尻^{しつぽ}にのような粟の穂がよく稔^ねって、だらりと頭を垂れるようにとの意味である。〈略〉このような例は川内や百宅の旧家でもやったものというし、〈略〉

秋田県の事例⑥ 秋田県仙北郡西仙北町【現、大仙市】——ぬめひろし（1996）『小さなむらの歩いてきた足跡』、北灯社（秋田県西仙北町）、p.173。

【小正月の15日の】翌朝の行事には珍奇な「粟穂」の話もある。これは全国に分布しているが江原田の某家では若い主人夫婦が裸になり囲炉裏の周囲を四ツ這いになって廻る。男が「粟穂が下^{した}った」と言う^うと女は「実^みこえて割れた」ととなえ

る。こうして三度めぐる。地域によってこの唱え文句が少し異なる場合もあるが大同小異。花館、長野、田沢などにも同じ家例があるという。

山形県の事例① 山形県最上郡安楽城村【現、真室川町】——山口貞夫・守随一(1938)「住制民俗——特に家普請に就いて——(二)」[《旅と傳説》第11年第4号、三元社、p.4]

山形県最上郡安楽城村で聞得た一例を述べておく。そこでは正月十五日の夜二三の家では、夫婦が裸になり、ユルリの廻りを三べん、又家の廻りも三べんめぐるのである。此時男が「コーラガワレタ」と唱へると女が「アワボが下る」と答へるさうで、ひどく卑猥な場面が想像される。これと似た例は郷土研究にも一つ出て居るし、宮本常一氏も、資料を所持せられた筈である。

山形県の事例② 山形県西置賜郡小国町——^{こんぎえもん}金儀右衛門(1959)『年中行事読本』、羽前小国民俗学研究所(山形県小国町)、p.131~132。

羽前小国年中行事表

この表は、未発表の拙稿「羽前小国年中行事概説」(一三〇枚)の項目と見出し語に、少し手を加えて配列したものである。〈略〉

一月十五日 小正月の年夜 裸まわり、さつき(十四日の夕方の所もある)、なり物、鳥追い、もぐらもち追い、なり木責め、松おろし、暁がゆ、たくあんの口あけ、団子祝い、おみだまの飯、小正月の年取り(士族には十四日の家もある)、牛馬の年取り、道具の年取り、力もち(十六日の朝の所もある)、さえじ焼き、かせどり、年取りねっこ、にお積み

☆金儀右衛門の著作に「裸回り」がある。と臼田甚五郎(1966)にあった。この語が小国町で用いられていた語なのか、あるいは金による命名なのか知りたいところであるが、金是一九六五年に死去し、今となっては確かめようがない。この行事に名称がないと不便なので、私は安田(1971)以来、この「裸回り」という名称を使っている。

山形県の事例③ 山形県最上郡鮭川村——早坂宗成(1967)「最上郡・鮭川地区の正月行事について」[最上地方民俗の会《最上地方民俗会報》第2号、最上地方民俗の会(新庄市)、p.8; p.10]

私の育った鮭川村真木新田へ行って七十才近い私の義姉と五十才位の同村高土井の一主婦からこのあたりで行われている正月行事について聴取してノートしてみた。〈略〉【正月十五日】夜半主人夫婦が裸でおきてイロリのはたを次のような唱えごとをしながら数回廻る。

「こうらがわれた。あわんぼさがた」

このことは大正初頃までは確かに行っていた家があったという。

山形県の事例④ 山形県最上郡大蔵村肘折・沼の台——佐久間昇(1968)「大蔵村肘折・

沼の台周辺の年末年始の行事」〔《最上地方民俗会報》第9号、p.4～5〕

十五日、小正月。〈略〉「アワボ」夜中、主人と主婦が裸で「アワンボさがった。コウラがわれた」と唱え炉を三周する家があった。

山形県の事例⑤ 山形県西置賜郡小国町——臼田甚五郎（1976）「子守唄のふる里を訪ねて（8）オロロンの哀愁」〔《マミール》第5巻第12号、佼成出版社、p.57〕

小国の小正月の夜に夫婦が囲炉裏をまわって、女房がヘラ（飯杓子）で亭主のものをたたき、亭主がスリコギで女房の尻をたたいて、「粟穂はさがった、実が入って割れた」ととなえて祝っていた家もあったのである。

山形県の事例⑥ 山形県最上郡金山町有屋地区——東洋大学民俗研究会（1987）『有屋の民俗—山形県最上郡金山町有屋地区—』（昭和六十年調査報告）、p.229～230。

〔イロリの裸まわり〕 田尻では、家長と妻がイロリのまわりを裸でまわる。男性器がたれるのは稲穂がたれる、女性器がわれるのは実がわれるという意味だという。（柳原 三上與兵衛氏）

〔イロリの裸まわり〕 大みそかの晩、家族が寝てしまうと、じいさんとばあさんが全裸になり、じいさんが先でばあさんが後になり、四つんばいで、イロリのまわりを三回まわる。このとき、「アワボサガッタ、コーラワレタ」と声をかけながらまわった。（下向 五十嵐シズエ氏）

〔イロリの裸まわり〕 一月一五日の晩に田尻や入有屋では、夫婦でイロリのまわりを三回くらい四つんばいで右まわりに、「アワボサガッタ、コーラワレタ」といつてまわった。作だめしのために行ったという。（宮 沼倉ヨノ氏）

〔イロリの裸まわり〕 一月一五日の夕食後、「アワボサガッタ」と男がいい、「ソラワレタ」（成熟を示す）と女がいつて、家族全員でイロリのまわりを歩いたという。（稲沢 阿部鉄太郎氏）

〔イロリの裸まわり〕 一月一五日の晩、夫婦でイロリのまわりをまわったという。地境の大山ソウエモンの家ですという話を聞いたことがある。

（稲沢 増川タツヨ氏）

山形県の事例⑦ 山形県米沢市田沢——武田正（1997）『子どものフォークロア—その異人ぶり—』、岩田書店、p.58。

山形県米沢市田沢での伝承について見ると、大晦日の行事として旧家にだけ残っている。

爺と婆が丸裸になって、囲炉裏の回りを四つんばいでアキの方角から三回廻る。爺が「粟穂が割れた」と言えば、婆が「粟穂が下がった」と応じながら廻るのだという。「割れた」とは女陰のことを意味し、「下がった」とはもちろん男根がぶら下がったことを意味するものだが、丸裸になるのは、自然そのままになることを意味

するのだろう。

茨城県の事例① 茨城県那珂郡東海村須和間字小沢野^{おぢやの}——茨城県東海村教育委員会・東海村小沢野遺跡調査会（1978）『小沢野—茨城県東海村須和間地区における古代集落の研究—』、p.241。

正月三が日の間須和間のある家では、当主が蓑笠をつけて、囲炉裏に足を入れて（方言ではドダパイリ）、粟の粥をすすると伝える。また夫婦で囲炉裏に向きあって座わり、この時、下着を着けず、男のものと女のものを何回か見せあうという。男はこの時「稲穂はさる（出る意）」と言ひ女は「マエタが割れた」と言う^{うづばい}と伝える。

群馬県の実例① 群馬県前橋市筑井——群馬県教育委員会（1975）『前橋市城南地区の民俗』（群馬県民俗調査報告書第十七集）、p.196~197。

アワボ・ヒエボ 父と母が座布団で男根・女陰の形を作って「アワボ・ヒエボ・ガッチャガチャ」と唱えながら、おっかけっこをしたという話を聞いたことがある。（筑井）

群馬県の実例② 群馬県勢多郡赤城村【現、渋川市】——都丸九十一（1977）『上州の風土と方言』、上毛新聞社（前橋市）、p.182。

これ【＝ヌルデで作った粟穂・稗穂】を堆肥場に立てる。重い粟穂と稗穂であるから、竹枝はしなだれてよく稔った状況となる。そんな状態を

アアボヒイボ この通り

このよ（う）なかますに 十かます

と唄う、私自身、これを赤城村で、老婆が負うた子をあやしながら唄うのを聞いたことがあるが、〈略〉

群馬県の実例③ 群馬県吾妻郡六合村^く【現、中之条町】——大島建彦（1977）「日本神話研究と民俗学」〔『講座日本の神話1（日本神話研究の方法）』、有精堂出版、p.86。

資 料	時 日	対 象	唱 え 言	備 考
井田安雄氏調査			(共) アーボにヒューボ、 それいれるカマス	すりこぎ、すりばち
井田安雄氏調査	正月一四日夜		(夫) ヒエボアワボこのとおり (妻) うちのカマスもこのとおり	粟穂稗穂

群馬県の実例④ 群馬県勢多郡宮城村【現、前橋市】——群馬県教育委員会（1981）『宮城村の民俗』（群馬県民俗調査報告書第二十三集）、群馬県教育委員会、p.181; p.200。

節分の呪^{ママ}、アーボヘーボ（アワ穂ヒエ穂）の行事があったことを、実際に見聞した人から聞けたのは珍しいことであった（柏倉六本木なつ氏談）。市之関で夫婦がいろいろの回りを左右からはい回って、「アーボモヘーボモコノトオリ、コノヨノカマスニ^{トッ}十カマス」と唱えたという。本県内では実在が数例ほどしか知られていない奇習

で、豊作を祈願する予祝・擬態行事の一つと考えられる。〈略〉

アーボヘーボ 市之関のさとの隣には子のない夫婦もんがいた。子どものころよく遊びに行っていた。節分の時にも遊びに行って、何してるかな、って思って障子の穴から中をのぞいてみた。そうしたら旦那とかみさんで「アーボヘーボもこの通り、このよのカマスにとっかます」っていいながら夫婦して四つんばいになってイロリをこっちに回る人にあっちに回る人がいて両方から回ってた。何のわけだがな、おもしれえと思ったから家へ帰って見てきたことを話して「おらうちじゃああいうことをしねんかい、とてもおもしろかったが」って言ったら「子どもはそんなもん見るもんじゃねえ」っておこられた。隣の人は小池さんて人でたしか大正元年ごろだった。(柏倉)

群馬県の事例⑤ 群馬県渋川市八木原——渋川市誌編さん委員会(1984)『渋川市誌 第4巻 民俗編』、渋川市、p.849。

炉端めぐり ある家では夫婦が全裸になり、いろいろの回りを^は這いながら
粟穂・稗穂^{あわほ ひえ}このように取れた。

粟、稗、このような^{かます}吠に十三俵

と唱えながら何回もまわる。この行事は最近まで行なっていた。(八木原)

群馬県の事例⑥ 群馬県各地——渋川市誌編さん委員会(1984)『渋川市誌 第4巻 民俗編』、p.814。

学問上「炉端回り」などと呼ばれる行事が、本市八木原にも近年まで行なわれていたことは注目に価する。この行事は、赤城村津久田、子持村上白井、小野上村小野子、群馬町などの近村にもあったことが最近しだいに明らかになった。

群馬県の事例⑦ 群馬県勢多郡赤城村【現、渋川市】・北群馬郡小野上村【現、渋川市】村上——都丸九十九(1986)『歳時と信仰の民俗』、三弥井書店、p.72~73。

かつて私は、勢多郡赤城村で子供をあやしなながら口ずさんでいる老婆の唄に耳をそばだてたことがある。

アーボヒーボ この通り

このよのかますに 十かます

〈略〉いまにして、そんなこともあったかと思われるような^{しよき}所作であり歌詞であるが、それはあきらかに予祝のまじないである。

群馬県の事例⑧ 群馬県各地——阪本英一(1997)『群馬の小正月ツクリモノ(上)』(みやま文庫146)、みやま文庫(群馬県立図書館内)、p.15; p.73~74。

アーボ・ヒーボ(粟穂・稗穂) ツクリモノのアーボ・ヒーボは、堆肥場の堆肥の上に飾られるが、六合村、子持村・渋川市などの伝承では、十四日の深夜、家族の寝静まった頃、主人夫婦が裸になっていろいろのまわりを這いまわりながら、主人が

股間を叩き「アワボ・ヒエボこの通り」と唱えると女房も股間を叩いて「こんなかます（呎）に十かます」と答えてまわったという。裸まわりといわれる幻の行事であった。〈略〉

小正月の十四日の深夜、アーボ・ヒーボ（粟穂・稗穂）の行事があったことが知られている。「いろりの裸まわり」といわれるものであり、群馬県下では次の七市町村の事例が知られている。

勢多郡赤城村、同郡宮城村、渋川市、群馬郡群馬町、北群馬郡子持村、利根郡利根村、吾妻郡六合村。

行事の概要は次のようである。

小正月のオカザリカエをし、十四日の年とりもすんだ深夜、夫婦が裸になり、四ツんばいになって、いろりの回りを這いながら主人が「アーボ・ヒーボこの通り」と唱えながら股間を叩くと、主婦が「こんな呎にこの通り」と唱えながら同様に叩いてまわる。まわる回数は明らかでない。〈略〉

何れの話でも「行事の結末」については語られていないが、他県の事例もみるかぎり、夫婦のまじわりがあって行事を終わることが考えられ、東南アジアの田植え後の習俗にもみられるように「豊作祈願の行事」であり、十四日の夜が秋の豊作を祈る大切な日だったことを示している。

群馬県の事例⑨ 群馬県北群馬郡小野上村【現、渋川市】小野子——水沢謙一調査（長岡市日越町にて群馬県に親類のある人からきく）、安田に教示。

一月十四日の夜、トトとカカが、はだかになって、イロリマワリする。

トトが

「アワ、ヒエ、ブラブラ」

カカが

「^{（大きな）}こったいかマスにヒトカマス」

という。

群馬県の事例⑩ 群馬県（詳しい地名は不明）——板橋春夫（1980）「イロリの民俗」〔群馬歴史民俗研究会《群馬歴史民俗》創刊号、群馬歴史民俗研究会（伊勢崎市）、p.19〕

小正月の夜、夫婦が裸になって、「アワボもヒエボもこのとおり」と言って主人が股間のものをぶらぶらさせると妻がそれに呼応して「カマスにたあんとたあんと」といって呎をたたき真似をしながらイロリのめぐりをまわる習俗もイロリが冬場には寢床になっていた時代を考えるとさほど奇異には感じられなくなってくる。

埼玉県事例① 埼玉県大里郡川本地方——井上善治郎・酒井勇治（1977）「著者に聞く」〔《しらこぼと通信》No.5〔井上善治郎（1977）『まゆの国』（しらこぼと選書6）付録〕、埼玉新聞社出版局（浦和市）、p.4〕

井上 東京に近い埼玉県で、養蚕と人とのふれあいがどうだろうか、興味がありました。〈略〉大里郡川本地方では、昭和の初めごろまで、小正月にいろいろ端でご主人がすっ裸で「アポーヘポーブラブラ」と言うと、奥さんがお尻をまくって「後からカマスがついて来ます」と言って、いろりを三回回ると、その年の蚕は大当りだろうと。それは面白い行事なんですけれども、なくなってしまいましたね。

埼玉県の事例② 埼玉県比企郡滑川村【現、滑川町】——滑川村役場企画財政課(1984)『滑川村誌 民俗編』、滑川村、p.225。

アポーヒーポーブラブラ 小正月の晩、夫婦が裸で四つんばいになり、夫が「アポーヒーポーブラブラ」、あとから妻が「^{かます}吠 持って参ります」といいながら、二人でイロリのまわりを三回まわる。これは、かつて大名主をした羽尾倉林^{はねおくらばやし}の旧家倉林栄氏宅で明治頃まで行なわれていたという行事である。羽尾裏郷の小林やす氏によると、この行事は、村の人の話題にもしばしばのぼり、倉林氏宅に新しく嫁にきた人がこれをするのをいやがったので、大正になってからは行なわれなくなったという。今では栄氏宅でも知らないそうである。

中尾の荒井伝寿氏によると、同じく羽尾の裏郷の吉野氏宅でも、明治以前には小正月の晩に、男が先になり、「アポーヒーポーブラブラ」、あとから女房が「^{かます}吠 持って参りましょう」と言って、イロリのまわりをまわったという。

伊古田尻の石井ハナ氏宅では、以前、小正月の晩に家の中を暗くして、「アポーヒーポーブラブラ」と声を掛け合いながら新婚の夫婦が互いに探しあったという。また、和泉上でも、小正月になると、「アポーヘーポーブラブラ」「しょうぎ持って参ります」ということを、話の種にしたという。

埼玉県の事例③ 埼玉県秩父郡長瀬町^{ながとろ}——埼玉県歴史資料館(1986)『小正月とモノツクリー埼玉西北部を中心にー』(民俗資料調査報告書第三集)、埼玉県歴史資料館(比企郡嵐山町)、p.179。

秩父郡長瀬町にもこの【「粟穂・稗穂ぶらぶら」の】伝承があることが、今回の調査で明らかになった。古い話で唱え言などもはっきりしないが、断片的な伝承を整理すると、おおよそ次のようになる。

一四日の晩、男は下半身裸、女は腰巻姿で双方分かれて囲炉裏の回りを回る。その際、唱え言を唱え、両者が出会うところで男女の営みを行う。その後は、すりばちとすりこぎを持って回ることに変化した。唱え言は、男「ソンシテクトルコノマラハ……………(不明)、女「ソンシテクトルコノツビハ……………(不明)」などと唱え、あとに「碓氷峠のマゴジャクシ」の言葉が付く。さらに「コトシハハウネンマンサクデ アワボ・ヒエボブラブラ デッケエカマスデ トッカマス コトシモホ

ウネンマンサクダ」と唱える。

埼玉県事例④ 埼玉県大里郡寄居町塚田——埼玉県（1986）『新編埼玉県史 別編2 民俗2』、埼玉県、p.299。

【削り花を】堆肥場に飾るとき、「アボヒボぶらぶら、カマスを持って参りましょ」と三回唱える。こうすると、肥料が良くできて作物がたくさん実するという。これらのハナは、「二〇日の風にあわせるな」といわれ、二〇日以前には下げるのだという。下げたハナは、神泉村での事例と同様に、早く熟蚕となったものの簇代わりに使った（寄居町塚田）。

埼玉県事例⑤ 埼玉県入間郡日高町【現、日高市】南平沢——日高町教育委員会（1989）『日高町史 民俗編』、日高町、p.54。

アボヒボ（粟穂・稗穂） 小正月の十五日にアボヒボを作り、神棚に供え、農作物の一年間の豊作を祈願する予祝行事が行われる。〈略〉

これを竹の先を割った所に挿して畑に立て五穀豊饒を祈るものである。この時に、「アボヒボ、ブラブラ」などと唱え言をいう（南平沢）。

神奈川県事例① 神奈川県横浜市鶴見区三池の近く——和田正洲（1961）「神奈川県下の年中行事」〔神奈川県立図書館『神奈川県の歴史（県下の民俗篇 上）』（神奈川県立図書館シリーズNo.6）、神奈川県立図書館、p.87〕

鶴見区三池の近くの某家では、昔は十四日の晩戸主夫婦が裸になって囲炉裏をめぐったという伝承がある。山形県でも似たような行事があることが、丹野正氏によって報告されたことがある。

神奈川県事例② 神奈川県^{はだの}秦野市——秦野市（1987）『秦野市史 別巻 民俗編』、p.484。

新年の祝いとして年男は朝五時前に起きて朝湯に入り、身を清めて、新しい褌を締め、新しいゲタを履いて庭に出る。女性は新しい腰巻を締めて庭に出る。二人そろくと年男は右回り、女性は左に家を三回まわる。

そのとき交わされるあいさつは年男が「あわぼ」「ひえぼ」「あわぼ」「ひえぼ」といいながら着物のすそをまくり上げ、男根を見せる。女性も同じように着物をまくり上げ、女陰の前に「み」を置き回るのである。

新潟県事例① 越後（地名の詳細は不明）——宮本常一（1937）『河内國瀧畑左近熊太翁舊事談』（アチツクミュージアム彙報第23）、アチツクミュージアム、p.78~79。

之は私【=左近熊太】が八卦を見ながら越後の國を歩いて居つた時にきいたものである。越後では郷土で人を十四五人も使つてゐる所では除夜の鐘が鳴るとゴヤの祝といふのをやる。之は河内のこの村もやるが。越後ほど固くない。で大體越後を標準にして話す。

鐘が鳴ると、嫁が大戸口から座敷の方を向いて前をひろげて立つ。すると主人は大黒柱によりかゝつて、男も前を見せる。さうして

「ホーダレ（穂垂れ）を見よ」

と言ふ。妻が答へて

「貝が割れた」

といふ。もみに實がよく入つて皮のわれたのを貝がわれると、河内でも言ふが、つまり前のもので豊年をとへて祝ふのである。之を三べんくりかへして言ふ。それがすむとトータンの盃になる。

その時セキ（上座）には番頭が坐り兩親がすわる。座には使はれて居るものが全部、番頭を中心にして居流れる。すると主人が中闕に坐つて、扇子を前におき、番頭その他の者に

「本年は誠に御苦勞であつた。正月の祝として何かしたいが何も出来ぬ。お粗末なものであるが、どうぞ控へて呉れ」と言つて錢をつけてやるのである。さうして盃をまはす。前を見せる事はこのあたりではしないが、それ以外は越後と同じである。

挨拶がすむとトータンの盃になる。トータンと言ふのは例の五つ重ねのムサシノを出して来て、盃を下の大きいから順々に上席から末座へまで配つて行く。

新潟県の事例② 新潟県中魚沼郡津南町貝坂——滝沢秀一（1978）「越後・妻有地方における小正月のつくりものについて」〔日本常民文化研究所『小正月行事とモノツクリ—秩父・越後・中部—』（日本常民文化研究所調査報告 第1集）、日本常民文化研究所、p.74〕

粟穂ふれ、穂ふれ

津南町貝坂にかつてあったと伝えられる行事で、十五日の早朝、主人夫婦が裸になっていろいろのまわりを這つて廻りながら、まず夫が「あわほふれ ほふれ」という、妻がこれに唱和して「えみれ、えみれ、えみわれた」という。群馬県や東北地方には広くあったと聞いているが、当地方にも古くは行われていたものであろうことは、他の一連の行事と組み合わせると推察できるように思う。

新潟県の事例③ 新潟県北魚沼郡入広瀬村【現、魚沼市】大白川——新潟県教育委員会（1979）『北魚沼』（新潟県文化財調査年報 第18）、p.211。

モグラ追ひ 大白川では、飾った「作祝い」の下で主人が横槌に繩をつけて、「ホフツタ、^{ママ}ホツタ」というと、女房が「みのって ぶちわれた」と掛け合いながら引き廻したという。

新潟県の事例④ 新潟県栃尾郷・北魚沼——水沢謙一（1983）『雪国の炉ばた語り—越後・栃尾郷の昔話—』、名著刊行会、p.4。

栃尾郷の山郷にも、北魚の山郷にも、「イロリハダカマワリ」という行事が、小正

月の晩におこなわれました。夫は、^{ふんどし} 褌 をとって「アワボ、ブラブラ、ヒエボ、ブラブラ」といいながら、赤々と燃えるイロリを三度まわり、妻も腰巻をとって、「このかますに、ななかます」などといって、だいじなところを、シャモジでたたきながら、三度、イロリをまわったという。カンノ（焼畑）の作祝いでした。

新潟県の事例⑤ 新潟県中魚沼郡津南町貝坂——滝沢秀一（1984）「粟穂ふれ穂ふれ」〔新潟民俗学会《高志路》第270号（小正月特集）、p.21〕

中魚沼郡津南町貝坂の小正月行事に「アワボフレ ホーフレ」という一風変わった行事が、かつてあったと伝えられている。

それは、一般的にはイロリマワリとかハダカマワリと呼ばれているもので、小正月の予祝的なわざおぎを伴った行事である。

小正月十五日の早朝、家にしたサクカザリの下に、切り藁を撒き散らし、その家の主人夫婦が素裸になって、四つんばいになって這い回りながら、主人がまず「粟穂ふれ 穂ふれ」と唱える。すると妻君の方がこれに唱和して「えみれー えみれーえみわれた」と言う。おそらく、いろりのまわりを回ったものと思うがそれは確かなことは、いままでのところ聞けない。

その家でも、もう記憶していないが、大正の初期ごろにはまだ、切り藁を撒いた中で、田の草とりのまねごとをしたり、団子の木の下で休んでお茶を飲んだりしたことは、老人の話に残っていた。このことは当地方では、以前には一般にあったことのようにだが、「アワボフレ」の方は、いままでのところ全く事例がない。しかし、近いところでは群馬県や山形県にはあったようなので、あるいはそうした地方との関係があったのかもしれない。何か手がかりをつかみたいものだと思う。

新潟県の事例⑥ 新潟県十日町市新水——十日町市史編さん委員会（1995）『十日町市史資料編8 民俗』、十日町市、p.660。

新水では十四日の夜、ジロの火をいっぱい燃やし、夫婦が裸で四つんばいになり、「粟穂稗穂、実が入っていみ割れた」とくり返し唱え、ジロの周りをめぐったものだという。

新潟県の事例⑦ 新潟県小千谷市朝日（旧、古志郡東山村朝日）——水沢謙一調査、安田に教示。

一月十四日の夜半、夫婦がはだかになって、いろりのまわりを三回歩きまわる。夫が褌をとって、

「アワボ、ヒエボも、このとおり」という。

妻も腰巻をとって、ベントウシャモジで、マンコをたたきながら

「このようなカマスで、^{なな}七カマス」という。

三回まわると上作になるという。かつて、村の舊家に伝承した行事であったとい

う。

新潟県の事例⑧ 新潟県北魚沼郡湯之谷村【現、魚沼市】芋川——水沢謙一調査、安田に教示。

一月十四日夜半、夫婦がはだかになって、夫はオメグリボウをふりふり、「穂をふって、穂をふって」という。妻は、オツユシャモジで、マンコをたたきながら「実^ミがいて、エミわれた。」という。豊作になるという。

岐阜県の事例① 岐阜県飛騨地方——山田白馬（1950）『飛騨民謡物語（その二）』（飛騨叢書第2冊）、新飛騨社（高山市）、p.3~4。

たつたりや
栃^{とち}の臺^{とう}

ゑんだりや
栗^{くり}の毬^{いが}

〈略〉

たつたりやの唄は乗鞍山麓の村で拾ひ、麻むつくりの唄は御嶽山麓で、秀ぶらりは白山山麓の村でと拾ひ得たもの、その何れもが現身を以て行ずる豊穂^[マツ]祈年呪術信仰に基く処のものであつた。

すく立つ栃の臺、咲みよき栗の毬に陰陽両性がなぞらへられ、其の交会結実のめで度き成果に豊穰を祈願する信仰行事、麻むつくり稗むつくり亦同断である。秀ぶらり亦同根のもので、先行誘導する裸婦につぐ裸夫の現はなる秀に顯はれる勢力如何に、その年の垂穂の程度を占断する処の神秘^[ママ]壯嚴な行事、是れには村おやぢ、おかた或は選に当つた夫婦者が潔斎旬日の後に奉仕するのであつた。

岐阜県の事例② 岐阜県吉城郡坂下村（のち、宮川村。現、飛騨市）——平瀬^{よりてゐる}拋英（1957）「飛騨山中より——岐阜県吉城郡坂下村——」〔日本民俗学会《日本民俗學》第5巻第2号、p.63〕

春田打ち。元日の朝、氏神詣を終えてから家の主人夫婦が、笠とバンドリを着て、農耕の所作をする。花餅の飾ってあるオマエの間を田に擬えて敷居を畔とし、田の草取りの所業の時はその畔に腰を下して「タツたりや^[ママ]栃の塔、イエンダリや栗のイガ」等といつて、あらゆる食物の豊作を見ている様に、遠くの山々や四方の田畑を眺める真似をする。（字山之山）（春田打が行われているのは山之山部落のみであると聞いたが、山之山は現在では一軒より家がなく、遠く隔つた山中にあるので降雪の為行く事が出来ず山之山から中沢上に嫁いておられる中沢とよさんからの又聞きである故、くわしくは聞けなかつた。）

岐阜県の事例③ 岐阜県飛騨地方——山田白馬（1966）「回想の飛騨童謡」〔飛騨郷土学会《飛騨春秋》第11年第8号、飛騨郷土学会（高山市）、p.9~10〕

年 ば め

□

たったりや、栃の^{「ママ」}苔
えんだりや、栗のいが

□

麻むっくり、稗むっくり
むくりこ、木の子

□

穂をぶら、ぶらり
ふと長う、ぶらり
しっこり、秀の穂

□

さいはち鯰（なまず）
蟹の泡ごっつお
とろろをすろか
若い駒いきむ

〈略〉

たったりや栃の苔から、若い駒いきむまでの、呪言の断章のようなそれが、悠長に唸るように祈り謡われるのであった。童達はそれがまだるっこいのか、聞き覚えているので大声をあげて真似たものだ。

〈略〉

秀をぶらは、秋田おばこの、八重穂がさがった、甲羅がわれたに似通う行事で、節分に焚火を囲んで、裸形の男尊女尊が衆人の眼の光る中で……その祈り謡に合わせて踊る行事だった。

☆「秋田おばこの、八重穂がさがった、甲羅がわれたに似通う行事で、」とあるから、山田は武藤鉄城（1932）が報告した秋田県仙北郡の事例を念頭に置いているようだが、民謡「秋田おばこ」の歌詞には、「八重穂がさがった、甲羅がわれた」に該当するものは全くない。要するに、^{しょうかわ}秋田の行事の唱え言、ということを手田が「秋田おばこ」と言ったものらしく、不正確な表現である。

岐阜県しょうかわの事例④ 岐阜県大野郡 莊川村【現、高山市】——莊川村史編集委員会（1975）『莊川村史 下巻』、p.198。

莊川地方では古く正月中に僧侶が家々を訪れ、主客のあいだに挨拶が交わされた。その挨拶のことばに、僧が「とちのとう立ったり。」といえは、主人すかさず「三石もひろったり。」と答えたとは古老の述懐である。

☆これは、`夫婦、`裸、`イロリを回る、という要素はないが、唱え言の「とちのとう立ったり」は、さきに見た岐阜県の事例②の唱え言「タツタリや栃の塔、イエンダリや栗のイガ」や、富山県東礪波郡利賀村【現、^{なんと}南砺市】（安田 1981）の裸回りの唱え言「たつたりやたつたりや栃の花。」（男）、「よんだりや、よんだりや栗のいが。」（女）などと同種のものであったのだろう。

兵庫県の事例① 兵庫県^{みかた}美方郡美方町【現、^{かみちよう}香美町】茅野——稲田浩二・小沢俊夫（1978）『日本昔話通観 第16巻（兵庫）』、同朋舎 p.244~245。

むかしい、あるところに大きな旦那衆さんがありまして、その家^{うち}に、男衆さんを置いてとりまして、ところが、正月になったところがまあ、餅よけ搗くだしして、まあ、「今は休みだすきゃあ、大年だすきゃあ、遊んでこい」って言われるもんで、遊びに行ったふうで、縁の下にそおとすくろんで、隠れて見とるとが、^{ママ}おおじいさんは、おもてって、昔の者あ言いますだけど、おもてっていうところからでてきたあ、お嫁さんが出てくるとこは、このちようでいっていうところですだし、^{ママ}おおじいさんの方は禪もなんにも取って、「おーぼがぶらぶら」って^{ママ}おおちんこを出いて、おかみさんは、ちようでいから、お腰もなんにも取ってえて、「きゃーがあったかみてくれ、きゃーがあったか見てくれ」おそそ出いて、出てきんさるだし、その男衆も、おかしゅうて、かなわんだけど、僕もまあ一つ頓知やって出よう、と思って、縁の下からして、「小ぼうまでぶらぶら」って出たら、「なんちゅうまあ、ええことを言ってくれるだらあ。お正月、げんのええことを言ってくれる」。

「大ぼがぶらぶら」ちゅうのは、稲の穂大きくなりやんだあ、女子が、おそそ出あして、「きゃーがあったか見てくれ」ちゅうのは、稲の穂を出して、花をしたときに、実がのるのになあ、その男と女子との、まあメスとオスとがまああってなあ、そないしてまあ実がみのるっていう意味で、その「きゃーがあったか見てくれ」って言って、おばあさんの方は出るだし、^{ママ}おおじいさんの方は、「大ぼがぶらぶら」おちんこ出して出てくるだしたら、男衆が、「小ぼうまでぶらぶら」って出ましたもんで、「なんちゅうええことしてくれるだ。まあおめえは。そのくりやいええことしてくれるだったら、^おこん家の跡とり、この男衆においたるけど、なってもらって、こん家の福虫になってくれ」ちゅうことで、たったそれだけのことを言ったばかりに、大きな旦那衆の息子さんにしてもらって、嫁さん取って、もらって、とっても運がよかったで、人間はなんでもが、頓智ちゅうことが、一番大事だすきゃあで、人がいよっても、ええ方に、「ああおかし」って言ったら、それが子にしてもらえんにじゃあ、「小ぼうまでぶらぶら」って出ましたって。

それで、「稲の穂が小ぼうまでぶらぶらしせえしゃあ年がええ」ってって、そんな家の^おおじいさんやおばあさんが喜んで、そんな家のあととりい、旦那衆さんの子にして

もらいましたって。

和歌山県の事例① 和歌山県^{にしむろ}西牟婁郡^{おおとう}大塔村（旧、富里村。現、田辺市）——國學院大学民俗学研究会（1977）『民俗探訪 五十一年度』、p.184~185。

正月一日に豊年を祈願して家の者が次のようなことをする。「前田がひびた」といって母親がしりをまくって部屋の中をはい、そのあとを「長穂でぶらり」と父が追い、「おおぼう（大穂）もこぼうもみなそろた」と子供がはう。これは沼田がかわいていて、ひびが入るくらいなら豊年になるので、前田（家の前の田）がかわくようにという呪術である。

鳥取県の事例① 鳥取県^{やづ}八頭郡^{もちがせ}用瀬町【現、鳥取市】江波——坂田友宏（1975）「鳥取県の歳時習俗」〔鶴藤鹿忠・新藤久人・松岡利夫・酒井董美・坂田友宏『中国の歳時習俗』、明玄書房（東京都）、p.233〕

元旦に雑煮やお屠蘇を頂くことを朝祝いといっているところが多い。〈略〉

八頭郡の用瀬町・船岡町などでは、大晦日から朝祝いまで、とくに年男は一睡もしていないので、朝祝が済むと大ぐまを積むといって寝てしまう。用瀬町江波では大ぐまを積んで起きることを稲上げといい、男が起きるときには「大穂^{おうぼう}がブラブラ」子どものときには「小穂^{こぼう}がブラブラ」といって起きる。

岡山県の事例① 岡山県勝田郡勝田町【現、^{みまさか}美作市】梶並——岡山県教育委員会（1971）『阿波・梶並の民俗』（振興山村民俗資料緊急調査報告書（Ⅰ））、p.283。

『毎年、元日になると奉公人を外にあそびに行かせる。奉公人は不思議に思って、隠れて見ていると、お年様の前で、主人が前を開いて、「大穂ぶらぶら」という。すると奥さんが、同じく前を開いて、「貝の口しめた」という。奉公人はとび出して、「小穂^{こぼう}までぶらぶら」という。主人は、目出度いことを言うてくれたといってよろこぶ。そして御馳走をしてくれる』

この話は、上駿口の長畑鹿之助（明 42.8.4）さんの語ったものである。これは、子どもの頃、正月礼に行き、分家のおばさん長畑ゆくさんから聞いたものである。

岡山県の事例② 岡山県勝田郡勝田町【現、美作市】塩谷——立石憲利（1980）『だらずばなし—岡山県勝田郡勝田町・奈義町の昔話—』、著者自刊（岡山県総社市）、p.5。

奉公人が正月元日の朝、早う起きてみたら、そこの家の旦那さんが、横座の隈に、ちゃんとん座と横座をまたげて、前を向き出あて、

「大穂はぶらぶら」いうことを、主人公が言うたいうて。そうしたら、おかみさんが、下（しも）から、

「おめでとう」いうあいさつをした。それをそこの奉公人が見ようて、こりゃあ面白いことを旦那さんやりようる。わしもやってみちゃろうかいうて、その奉公人が、

下のひら（側）から、

「奉公人もぶらぶら」言うて、前うはたけた。そうしたところが、ご主人にどえらい
 気にいって、

「ああ、お前うまいことをやってくれた。今年は大豊作じゃ」言うて土産をくれた。

5 大都会の町中の事例

これまでに見てきた裸回りは、すべて農村におけるものであった。しかし、大都会の町中
 で行なわれ、典型的な裸回りとはやや大きく相違するものがある。江戸城の節分行事として
 の「新参舞」、京都市上京区の冷泉家の節分行事（飯島 2001 が指摘）、熊本市の中心部の商
 家の元日の行事としての「スリコギ舞い」、である。

大都会の事例① 江戸城の新参舞——永島今四郎・太田賛雄（1892）『千代田城大奥
 下』、朝野新聞社、p.6~7。

例年正月節分の夜（十二月節分の時は正月十一日の夜）新規召抱となりしお末
 が奥御膳所にて新参舞といふを催はす新たに召抱えらるゝ者毎年十人許りもあるべ
 し是等の女中は孰れも是非に新参舞の列に加はるなり〈略〉

既にその夜となれば夕飯果て、後新参舞のお末等各々惜氣もなく衣服脱ぎ捨て素裸
 になりて〈略〉、麝金、桃色、或は白木綿の湯巻を纏ひシの字返へしに結びたる頭
 に手拭を唐茄子冠りにし或は笊を被むるもあり或は繻絆一枚を纏ひて下腹に綿な
 ど詰め入れ懐妊の態に装ふもあり思ひゝゝに扮装て先達を頭らに一列に立ち並び
 南の溜りより御膳所に入りて豫て上段に備へたる三方（一間四方大）に御幣、
 摺子木、檜杓、杓子など積み重ねあるを順々に進みて先達は御幣を取り餘は好
 きゝゝに撰り取りて之れをば肩に擔げ右側に並み立つと等しく南の方に控えたる
 古参のお末二十餘名忽ち藥鐘或は桶の底を叩き立て叩き立て節面白く

新参舞を見しやいな

新参舞を見しやいな

と囃した立つれば音頭の調子に乗りが来て先達幣を掉り立て、先きに進めば餘は
 獲物擔げし右手を其のまゝ住吉踊ともいふべき手振り打ち揃ふて坐の中央なる
 圍爐裏（縦九尺横三間）を三度匝るを吉例とす

☆江戸城の大奥（将軍以外は男子禁制）という特別な場所が舞台となっているためか、「夫
 婦」という重要な要素が欠けている。しかし、男女の性器を象徴するスリコギ・シャクシは
 ある。

大都会の事例② 京都市上京区の冷泉家——冷泉貴実子・中川邦昭（1987）『冷泉家の年中行事』、朝日新聞社、p.134。

節分の昼食は麦入り飯と、鯛で祝膳を整える。

大豆は台所のおくどさん【＝かまど】で煎る。かつては男衆が豆を大きな焙烙に入れて、大豆の枝でかきまぜて煎った。その間、おくどさんの前に、木製の節分用の大しゃもじ（長さ八七センチ）と、同じく大連木（すりこぎ・長さ一〇二センチ）を脚の付いた膳の上に並べて置いておく。しゃもじには白紙を巻きその上に水引きを懸け、ごまめ二尾と柊の枝を付ける。連木には御幣の付いた注連縄を巻く。

戦前までは家族が見守る中、奥女中一人が「おめでとうございます」の挨拶の後、その大しゃもじを肩に担いで、おくどさんを北から南へ一廻りした。途中で豆を煎っている男衆ともお互いが正座して祝儀を述べた。連木の方は御飯炊きの女中が肩に担いで、おくどさんを同様に三廻りする。

大都会の事例③ 熊本県熊本市唐人町の商家——熊本市民俗調査委員会（1983）『熊本市内の年中行事調査報告』（熊本市民俗調査報告書第2集）、p.28~29。

唐人町の年中行事〈略〉

スリバチ舞 1月1日。屠蘇や雑煮を祝うのは子供が学校の行事を終って帰ってきてからであった。家の者や奉公人が足付きのお膳ごしらえの席についた。ここで屠蘇や雑煮を食べるが、このとき、新しく入った奉公人はスリバチ舞をしなければならなかった。男も女もやらされた。すり鉢を頭にかぶり、スリコギを腰にさして、扇子を手にかざして、「見さいな見さいな スリコギ舞を見さいな」といいながら、座敷を3回廻っていた。ほかの家ではあまりやっていなかったようである。大正8、9年頃までやっていた。

典型的な裸回りは、その家の夫婦二人だけで行われる。青森県・兵庫県・岡山県では、これに夫婦の子あるいは使用人が加わって三人で行なうが、見物する立場の人はいない。

これに対し、江戸城・冷泉家・熊本市では、使用人だけが行ない、主人夫婦は見物する立場にまわっている。

当の夫婦以外に大勢が参列する例として、左近熊太が語った越後の郷土の家（宮本1937）や、山田白馬（1950）（1966）が報告した岐阜県白山山麓の例があるが、これらの行事の当事者はあくまでもその家の夫婦である。これらの家のような、`多数の使用人や一族が一緒に住んでいて、その家の夫婦が行事を行ない、それを家族などが見る。という形から、冷泉家や熊本市の商家のような、`使用人が行ない、それをあるじ夫婦などが見る。という形に変化した、ということは考えられることである。そうだとすると、九州の熊本にも古くは典型的な裸回りがあった、ということになる。

裸。という要素は、三つの事例のうち江戸城の新参舞にしかない。しかし、いずれもスリコギとスリバチ（シャモジ）を使う。典型的な裸回りの事例でも、スリコギ・スリバチ（シャモジ）を手に持つ事例があるが（山形県・群馬県・新潟県）、これらの道具がそれぞれ男女の性器を象徴することは言うまでもなからう。江戸城でも京都でも熊本でも、男女の性器を象徴する唱え言、は欠落したが、「スリコギとスリバチ（シャモジ）」が、あまり露骨でない形で男女の性器を象徴しているのである。

なお、見物人に対しての呼びかけの言葉（唱え言とは言い難い）があり、それが「新参舞を見しやいな」（江戸城）、「スリコギ舞を見さいな」（熊本市）と互によく似ているのはどういうわけであろうか。

さらにもう一例、都会の事例ではないが、唱え言だけからすると裸回りに関連しそうに見える例が兵庫県城崎郡香住町^{かすみ}にある。本来は別の行事であったのが、あとから裸回りの唱え言と混交した、ということなのかも知れないが、参考までに挙げておく。

○兵庫県城崎郡香住町【現、美方郡香美町^{かみちよう}】——兵庫県教育委員会（1974）『但馬海岸—但馬海岸地区民俗資料緊急調査報告書—』（兵庫県民俗調査報告5）、p.116~118。

オ 香住町境の米粉神社の栗棒行事

本行事については、同町一日市長福寺（真言宗）住職山本祐道師から書面による報告を受けたので、これを転載する。

香住町境米粉神社における栗棒行事

場 所 神社境内の簀堂

日 時 毎年正月2日夕刻

司 祭 長福寺寺僧

参集者 境区内の若衆 12・3才から20才程度の男子に限る

△寺では旧ろう大晦の頃に小代紙（美方郡小代村産）の半切を菱型にして中央に天福院、左に牛玉、右に宝印と墨書する。読みは天福院ごおう宝印と読むが、この際とくに『牛玉』と書くのが慣例である。天福院の文字上に三宝朱印を押す。数は境区内の畑作り家数に応じるが、大正の頃は約60枚を用意した。

△村での当番家主は、12月頃山に入り、ハゼ・イルダ・ヌルデ等の乳木、長さ50cm位、親指大の木1本を求め皮をはぎ、これを福木、斉木（さいとぎ）と称し、新麻に粟・米2種の餅を重ねくり、木の先に粟穂をつける。

△若衆は正月2日区内各家を廻って餅・米・金銭を受ける。金銭は適当に菓子などの代物になるが、中には禁を犯して煙草を買う者もあるようであった。

△社の簀堂は炉にまきを燃し、車座となり集る頃、当番が弓張りちょうちんをもって寺僧を迎える。寺僧は雪中、足袋なしでお札箱に牛玉宝印の紙・経本・袈裟

を入れて社に至り、般若心経秘鍵 1 巻・心経 3 巻を読了する。当番はここで斉木を持ち『棒ふった、棒ふった、粟のさきがしわんだ、実がのった』あるいは『実がのったしわんだ』と声をかけて参集者の面額を打つと、牛玉宝印の紙に焼餅を少しづつ包んで渡し、寺僧は退散し、後は自由な若衆宿になる。

△古来は金竜院、繁昌院などの山伏が行っていたのだが、いつの頃から長福寺が代行したかは判明しない。

△私（長福寺 24 代住職山本祐道）が知っているだけでも、23 代祐戒、泰祐純（円後普住）、西坂祐瑞（幡州晋住）、宮谷祐乗（福知山晋住）、山本祐雄（竹野町晋住）は、みな親しくこの行事を行い、特に山本祐道は大正 7 年から昭和 14 年まで毎年これを行ってきた。

△明治 30 年頃の《1900》の 23 代祐戒の談によると、棒を受けた若者は裸になって石段をかけ降り、雪中の海から「竜のヒゲ」と称する海草を持ち帰ったり、神馬草（ホンダワラ）を持ち帰って中にはこれを僧の頭に冠せたともいうが、大正の頃《1920 頃》にはすでにこの習慣はなく、昔話として残っていただけである。

☆「古くは〈略〉山伏が行っていた」とあるが、プロの宗教家が関わる事例は他には岐阜県の事例④（唱え言以外には裸回りとの類似点はない）しかない。唱え言の「棒ふった」は、新潟県の事例⑤の「粟穂ふれ 穂ふれ」、事例⑧の「穂をふって」に類似する。

6 小正月の粥の唱え言

裸回りとは別の行事だが、群馬県・埼玉県・神奈川県には、同じ一月十五日の早朝に行なわれる粥の行事がある。`十五日の早朝、粥を煮る際に、粥を掻き回しながら、「山になれ、川になれ、海になれ、陸になれ」、あるいは、「固まれ、固まれ、この世が固まれ」と唱える。というもので、粥を原初の大地（あるいは、原初の海）に見立てて国土の生成・確立を祈願する行事である。これはさきに 3 で見た『古事記』『日本書紀』の神話の（1）（2）（5）と似ており、何らかの関連があるものと思われる。そうだとすると、『古事記』『日本書紀』のイザナキ・イザナミの神話の（1）～（5）のすべてが、現代の小正月行事と関連を持つことになる。しかし、「関連」と言っても、`『古事記』あるいは『日本書紀』といった書物の記述が元になって、このような小正月行事ができた、と考えるわけではない。`『古事記』『日本書紀』成立以前にあった神話的伝承が、一方では『古事記』『日本書紀』の神話となり、一方では小正月の行事となった、と考えるべきだと思う。

なお、埼玉県比企郡都幾川村【現、ときがわ町】と神奈川県藤沢市では、`小正月の粥の唱え言、と`裸回り、の両方が行われていた。同じ家で両方を伝承している例は報告されていないが、古くは、この両方を伝承する家もあったものと思う。

小正月の粥の唱え言については別稿「小正月の粥の国土生成の唱え言と記紀の創世神話」〔日本民俗学会《日本民俗学》第269号、2012年2月刊行予定〕で詳しく述べた。

7 おわりに

私はかつて裸回りについて、

- (1) 山奥の、古くは稲が作れなかったような土地で行なわれた。
- (2) 唱え言の中には「粟穂」「稗穂」は出てくるが、「稲」は出てこない。
- (3) 裸の夫婦は囲炉裏の火を回るが、火は焼畑耕作において大きな意味を持つ。
- (4) 『古事記』『日本書紀』のイザナキ・イザナミの神話と似ている。

ということから、裸回りは稲作（特に水稻耕作）の儀礼ではなく、畑（恐らくは焼畑）に於ける粟・稗の儀礼であり、イザナキ・イザナミの神話と関係があろう、と考えた。

しかし、その後、事例が増えた結果、若干考え直す必要が出てきた。

伝承地は平野部にもある（茨城県、群馬県、埼玉県、神奈川県）。そのうちでも、茨城県那珂郡東海村、神奈川県藤沢市は海にも近い。「山奥」とは限らないのである。

唱え言の「粟穂・稗穂」は東北地方・関東地方と新潟県に限られ、近畿地方・中国地方では「大穂・小穂」「前田」が出てくる。「大穂」とは、⁽³⁾大きな穂、の意であり、穀物ならば何にでも通用するものであるが、なぜ具体的な穀物の名が出て来ないのか、は大きな問題である。裸回りを稲作の儀礼と見る人は何人もあるが、唱え言に「稲」が出てくるのはわずかに茨城県の事例①と千葉県の実例①だけである。いや、「前田」は稲の水田であろう、と考える人も当然であろうが、東北地方では昭和の初年まで、水田に稗を植えることがあったから、必ずしも「前田」即「稲の水田」、とは言えないのである。

なお、富山県・岐阜県では唱え言に「枌^{とう}の臺」「栗^{いが}の毬」が出てくる。これは、畑や水田における農耕文化の儀礼ではなく、堅果の採集文化の儀礼ということになる。粟・稗の儀礼が堅果の儀礼に変化したのか、あるいはその逆なのかは、これまた大きな問題である。

注

- (1) 福島県にも裸回りはあるらしい。青山学院大学日本文学科のある大学院生に雑談で裸回りのことを話したことがあったが、その後、その大学院生の友人（福島県会津地方出身）が、福島県にもある、と大学院生に語ったという。しかし、その会津地方出身者から直接話を聞くことができなかった、ので、詳しいことはわからない。

なお、愛媛県の粟・稗の行事について、白石昭臣（1998, p.318; p.323）は言う。

〔事例8〕愛媛県上浮穴郡柳谷村では、正月十五日頃にフシの木を削った竹にさシアワンボを作る。これをエビスさんに供える。粟の収穫後、これを袋に入れ、山ノ神の木に掛ける。正月に粟穂・稗穂の作りもの、削り掛けのほかに、裸回りの儀礼もみられた⁽⁶⁾。

〈略〉

(8) 北九州大学民俗研究会『昭和五一年度調査報告書 柳谷の民俗』(一九七七年)。

これを読むと、愛媛県柳谷村に裸回りがあるように見える。そこで、その註(8)に挙げられている調査報告書を読んだが、裸回りには全く触れられていない。「正月に粟穂・稗穂の作りもの、削り掛けのほかに、裸回りの儀礼もみられた。」というのは、愛媛県柳谷村のことではなく、一般論を述べたのであろう。

(2) このほか、口頭発表を二回行なった。

①「裸回りの諸相と分布」〔日本民俗学会年会(第31回)、1979年10月7日、大正大学〕

②「裸回りと江戸城の新参舞」〔日本民俗学会談話会(第689回)、1988年11月13日、国学院大学〕
☆要旨は《日本民俗学》第178号、p.156～157。

(3) 私は安田(1971)で、淡路島(兵庫県津名郡^{ほくだんちょう}北淡町【現、淡路市】室津字大坪)の唱え言「おうほうぶり」の「おうほう」を「粟穂」のなまった形と考えた。しかし、近畿地方・中国地方には「大穂」が多数見え、それらがすべて「粟穂」のなまった形とは考え難い。淡路島の「おうほう」も「大穂」と解するべきであろう。

文 献

石田英一郎・高崎正秀ほか(1956)「座談 春の民俗」〔《民間傳承》第20巻第4号、民間伝承刊行会(秋田書店内)〕

稲田浩二(1970)『昔話は生きている』(三省堂新書)、三省堂。

白田甚五郎(1966)「日本文学の発生と性」〔《国文学解釈と鑑賞》第31巻第8号、至文堂〕

白石昭臣(1998)『農耕文化の民俗学的研究』、岩田書院。

土井卓治・佐藤米司・鶴藤鹿忠(1981)『岡山の民俗』(岡山文庫99)、日本文教出版(岡山市)。

武藤鉄城(1932)「裸體の行事二つ」〔《郷土研究》第6巻第3号、郷土研究社〕